

巻頭言

断層映像研究会雑誌再刊行に思うこと

多田 信平

最近はいたるところ情報が氾濫して、情報産業や情報戦争といった言葉も耳にします。情報はすべてを征し、情報におくれをとれば、この世にもはや生きてはいけなもののようです。インターネットによる情報の収集も怠ることはできません。それに合わせるように新しい医学情報雑誌の発刊もふえております。しかし、その増えた雑誌に必ずしも十分な原稿が集まっていません。数人ですが、知っている同種雑誌の編集責任の方々がそのため苦勞されています。あふれる情報と原稿の枯渇ほどのような関係にあるのでしょうか。一つには情報の収集に忙しく、分析発表する時間的余裕がなくなっているのか。あるいは旧態依然とした雑誌に情報源としての価値を認めなくなったのか。また、一般に書籍の売れ行きが悪くなっているそうですが、雑誌も読まれなくなっているのでしょうか。

話はそれますが、通勤電車のなかを見わすと、マンガをみている男性が目立ちます。女性は比較的には文庫本が多いようです。しばらく前に、日本経済新聞の「新聞変えたら出世した!」という広告の傑作がありました。すくなくとも電車のなかではマンガは新聞さえも圧倒しているようにみえます。マンガとテレビあるいはパソコンは人から活字への親しみを奪ってしまったのでしょうか。

医学雑誌として認知されているような場合は査読制も問題になるのかもしれませんが。投稿した論文に何かと言われるのは、それで内容がよくなるのが分かっている

も、あるいは指摘そのものに、釈然としないものを感じることもあります。査読者は同業の競争者であり意見を異にしていることがあります。それに査読には時間がかかります。インターネットであれば瞬時にしかも何らの制御もなく自由に全世界の人々に見解を発表することができます。また、インターネット上を逍遙すれば、無限の知見に遭遇することができます。しかし、無秩序な情報に如何ほどの有効な価値がひそんでいるのでしょうか。査読制はより良い情報を引き出すための、あるいは必要悪かもしれません。また図書館の効用が将来もおそらくなくなることはないのは、そこにはインターネットと違って良質な情報だけが整理されているからです。「カンファレンスは知識を迅速にし、読書は知識を豊かにし、書くことは知識を正確にする」といいます。カンファレンスはインターネットあるいはCD-Romに置き換えてもいいのかも知れません。アメリカ中心のインターネットのせいでしょうか。最近とみにカタカナが氾濫していますが、これも活字に対する愛着のなさの表れかもしれません。われわれは活字の文化を失ってはならないように思います。書くこと、論文を書くことは、その基本的な作業の一つです。是非、知識を正確にするためにも論文を書いて、伝統に輝く当断層映像研究会雑誌をもり立てていただきたく、これをもって巻頭の言といたします。

(東京慈恵会医科大学放射線科 教授)